

第二言語における動詞の意味関係の学習と母語の影響

Learning verbs and Influences of Mother Language in Second Language

梶田祐次[†], 佐治伸郎[‡], 今井むつみ[†]
Yuji Kajita, Noburo Saji, Mutsumi Imai

[†]慶應義塾大学環境情報学部, [‡]慶應義塾大学政策・メディア研究科
Keio University, Keio University, Keio University
mrksaran@gmail.com, nons@sfc.keio.ac.jp, imai@sfc.keio.ac.jp

Abstract

The aim of this study is to investigate how L2 learners sort out the relations among L2 verbs belonging to the same semantic domain and to show what degree their lexical knowledge of L1 influence the learning process of L2. To address this issue, we studied how learners of Chinese whose native language is Korean or Japanese apply various verbs to 13 videos depicting different carrying actions. The results revealed that the L2 learners' usage pattern of Chinese carrying verbs was similar to the pattern of dividing the events in their native language.

Keywords — Language learning, Reorganization process of word learning

1. はじめに

語の意味境界は独立に成り立つわけではなく、他の似たような意味をもつ語との関係の中で相対的に成立している。故に、学習者が言語学習においてある単語を正しく参照できるためには、一つの語で一つの対象を参照できるだけでなく、同じ意味領域にある語同士の関係を理解して使い分けることが必要である。この過程は特に、動詞の学習において重要である。動詞は具象名詞が参照するもののような知覚的に明確な境界を持たず (Gentner, 1982), 語の意味の境界が当該言語の体系に依存しているため、その事態を分節する仕方が言語により大きく異なる。そのため、自国語と異なる動詞の体系を持つ第二言語を学ぶ学習者は、自らの語意の知識を第二言語の語意へと再調整しながら学ばなければならない。本研究では、学習者が自身の母国語と異なる仕方で領域を分節する第二言語を学ぶ際、その使い分けの学習はどのように進むのか、その際に母語の影響はどのように表れるのかを探る。

2. 先行研究

本研究では[1]における研究題材と方法論を継承している。[1]では、第一言語獲得について、中国語の「持つ」系動詞群の意味関係を子どもがどの様に理解していくかを調査した。日本語でも「持つ」事態を表す動詞として「抱く」「抱える」等様々な動詞を持つが、中国語では「背(背負う)」「扛(担ぐ)」「举(高く上げて持つ)」など十数種の多様な動詞を使って表す点が特徴的であり、子ども及び学習者がどの様にこれらの関係を学習するかは興味深い問題である。本研究では、中国語を学習する学習者が、中国語の「持つ」系動詞群を学ぶ際、どの様な過程を経るのかを実験的に探る。

3. 実験概要

実験では刺激として[1]で用いた、13の中国語の動詞の表す動作を撮影したビデオを用い、被験者にはビデオを見てその動作を最もよくあらわすと思われる中国語の動詞を一語答えてもらった。

被験者は中国語母国語話者 21名、中国語を学習する日本語母国語話者 20名、同じく韓国語母国語話者 30名であった。結果は被験者群ごとに行に刺激のビデオ、列に産出された動詞を表した行列に集計された。

4. 日本語、韓国語の特徴

ここでは学習者の母国語である日本語、韓国語の特徴を概観する。まず日本語の「持つ」系動詞は、持っている「モノ」の前後や高低によって異なる動詞を用いる(「背負う: 背中」, 「抱える: 両手で前に」等)。韓国語もやはりモノの位置によって「持つ」動詞を区別するが(「anda: 抱く」, 「meda: かける」等)、特に日本語と異なる点と

して、日本語では動詞で区別する「背負う」(肩にバック等を)「かける」といった動作に対して、韓国語ではこれらをあまり区別せず「meda(掛ける)」一語で表現する。また日本語、韓国語共に、より一般的に「持つ」事態を表す動詞(日本語:「持つ」、韓国語:「dulda」)があり、この動詞は広く「持つ」事態に対して用いられる。

5. 分析

まず、韓国語(平均学習歴 39 ヶ月)、日本語(平均学習歴 28 ヶ月)を母国語とする学習者と中国語母国語話者との運用パターンを比較するため、3 で求めた学習者の運用パターンと、母語話者の運用パターンを表した行列の相関をとった。結果、中国語母国語話者と韓国語母国語話者の相関は.28、日本語母国語話者.15 程度であった。これは[1]で報告された3~5歳の中国語児と同程度の水準である。

次に、被験者が個々の動詞を用いてどの様にビデオを切り分けたかを視覚的に確認するため、被験者の動詞の産出データを用い、Multi Dimensional Scaling(MDS)を行った。結果を図1に示す。図1a 中国語母国語話者においてプロットは円状に散らばっており、それぞれのビデオが異なる動詞によって使い分けられていることを示している。一方、図1bの日本語話者のプロットでは、「na」「ti」「lin」等の語はグラフ中央に固まっており、適切に使い分けられていない。これらのビデオは日本語では殆どが「持つ」と表され動詞で区別されないビデオである。一方、「bei」「bao」は距離が離れており、他の語とは区別していることが伺えるが、これは日本語の「背負う」「抱く」がそれぞれ対応しているビデオである。

更に、図1cの韓国語話者のプロットにおいて次元1の中央に集まっているビデオは、やはり韓国語における「dulda:持つ」に対応しているビデオであり、さらにそれらのビデオからは区別されている「bao」、「bei」、「kua」はそれぞれ「anda:抱く」「meda:背負う」といった韓国語で対応する動詞が存在するビデオである、特に日本語と異なり、韓国語では「meda」として双方を区別しない「bei:背負う」と「kua:かける」のビデオの距離

が近く、これは韓国語の母語の体系と類似している。この結果は、学習者は中国語の動詞を用いる際、自らの母国語の語の体系を参照しながら語を用いている傾向があることを示している。

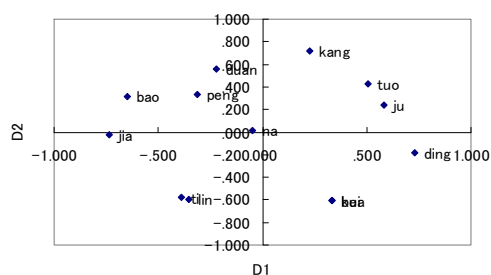


図 1a. 中国語話者

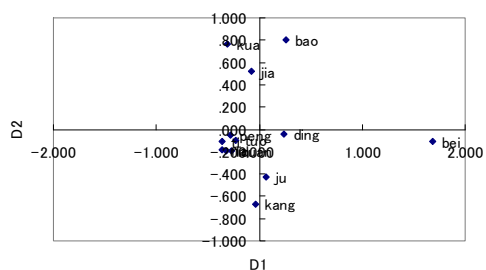
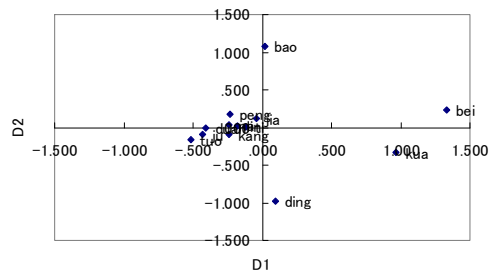


図 1b. 日本語話者



図

1c. 韓国語話者

6. まとめ

本研究は、母国語の語彙体系を学習に際しても直接的に適用する傾向があることを示した。このことは、学習者が異なる言語の語の体系を学ぶに辺り、母語との違いを意識して理解する必要があることを示唆している。

参考文献

- [1] 佐治伸郎, 今井むつみ, Saalbach Henrik. (2008). 語彙獲得における動詞の使い分けに関する研究: 中国語の「持つ」系動詞を事例として, 日本認知言語学会論文集第8巻 pp. 318-327.